

50周年を迎えて(1)

「私と大和文華館」

神戸大学 教授 大和文華館理事 百橋 明 穂



この度、開館五十周年を迎えるにあたり、思いで深いエッセイを掲載したいというお申し出があり、つらつら考えてみると、大和文華館との長くて深いご縁に驚かされる。初めて大和文華館との出会いがあったのは、今を遡ること四十年前であるということ思い出した。それは大学三年の時に専門課程である美術史学専修に進学して初めての関西見学旅行の際、大和文華館を訪れた時である。昭和44年、すなわち1969年、しかし季節はもう忘れてしまった。開館間もない頃のことだろう。法隆寺や東大寺などのお決まりのコースを経て、近鉄学園前の駅から坂道をたどったような気がする。竹の中庭には強烈な印象があるものの、ギャラリーで何を見たかについては、恥ずかしながら記憶にない。にも関わらず、忘れられない思い出がある。館内には見学者が少なく、ゆったりとしていたが、そこでかなりの高齢ではあるが、偉丈夫そうな老人から様々な話を伺うことになった。ギャラリーで立ったまま、美術館のこと、作品のこと、美術史学を目指した自分の経歴など、私のような初対面の若造に向かって、何度も繰り返してお話が続いた。その折にはその方が初代館長である矢代幸雄先生であることはすぐ理解できたが、イタリア美術研究の大家である先生と、日本・東洋美術

術の殿堂である大和文華館との関係についてはにわかには結びつかなかった。すでに八十歳を越えていらしたことにしろ。この時期に国立ではなく私立美術館として、すでに多くの優れた作品を収集し、開館を迎えたという高揚するお気持ちがあったように思われる。さらに云えば、そのコレクションも単なる財力によって高価な作品を収集したという自慢ではなく、自らの審美眼に基づいた愛おしい美術品を集めたのだという自負があったように看取された。矢代先生が西洋美術史研究の大家であることは云うまでもないが、日本・東洋美術史に関しての深い造詣は原三溪翁のもとで学んだ結果であることは後で知った。そして大和文華館の多くの名品が原三溪の旧蔵品からなることも自然な流れであろう。原三溪翁の経験豊かな作品への眼差しと矢代幸雄先生の審美眼とが見事な調和を見せているように思われる。茶人でもあった原三溪翁のこだわりが小さな作品にも息づいている。一つ一つを手にとって愛玩するような空気が漂っている。そのような小品で私がもっとも感歎する作品を提示して、この稿を締めくくりたい。それは「平治物語」断簡である。

云うまでもないが、院政期における保元・平治の乱の続く源平争乱の時期、平治

の乱を語った軍記物語「平治物語」を絵画化した鎌倉時代の絵巻である。「三条殿夜討」(ボストン美術館)、「信西巻」(静嘉堂文庫)、「六波羅行幸」(東京国立博物館)などに分蔵され、さらに他の巻の断簡が諸家に伝えられ、また原本はすでになく、その模本が残っている巻もあり、当初は相当規模の絵巻であったと推定されている。大和文華館の断簡は「六波羅合戦」の巻の断簡とされる。時は平治元年(1159)12月26日、一時は平清盛の六波羅の館まで攻め込まれたが、清盛の巧みな巻き返し戦術で、三条河原まで攻め挙げ、悪源太源義平を討ち取った。そこで遂に完敗した源義朝が、もはやこれまでと東国へと落ちのびる姿を描いている。鏝には



図1

図1 大和文華館の開館式(昭和35年)で外国の賓客に列品解説する矢代館長



図2

図2 平治物語絵巻断簡 鎌倉時代 大和文華館蔵

折れた矢が刺さり、追手をふり返る若武者金王丸の険しい表情、疲れて白馬にしがみつこうような義朝の姿、傍らの短冊形には義朝の文字もかき消され、落ち武者の悲哀が痛々しい。戦場の怒号や陣馬の響きまでも壮大なドラマの中に描き込み、大波乱の時間の経過とともに進行する絵巻であるが、その一瞬を捉えたこの断簡は見事なショットである。小さな画面でありながら、これほど緊張感を凝縮させた作品は少ないように思われる。戦場写真家ロバート・キャパをも唸らせるにちがいない。矢代幸雄先生の鋭い審美眼と情熱的な学識が、この愛すべき珠玉の小品を大和文華館にもたらしただろう。

季刊 美のたより No.168

平成21年10月4日

発行 大和文華館